

みやにし いっかくいせき
宮西・一角遺跡

1. 所在地 高松市林町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成10年12月16日
～平成11年2月1日
4. 調査面積 225㎡
5. 調査担当者 高松市教育委員会
山本英之 山元敏裕
6. 調査の原因 市道拡幅工事
7. 調査結果の概要

調査地は旧高松空港の北西部に位置し、昭和19年の陸軍飛行場接収による改変等で周辺に残る条里地割とは異なる区画をなす地域である。調査対象地は讃岐国山田郡田岡南地区比定地に含まれることから平成6年度から断続的に市道拡幅部分について調査を行っている。

今年度が4次目の調査であり、調査位置は平成6、7年度調査地の北側にあたる。発掘調査の結果、弥生時代前期から現代にかけての遺構を確認した。今回の調査区で確認した遺構は溝7条、土坑22基、性格不明遺構1である。このうち確認した土坑の大半は出土土器から弥生時代前期末から中期初頭にかけてのものである。溝は弥生時代のものと現代のものを確認している。平成7年度の発掘調査で弥生時代後期前半と古墳時代後期の遺物を出土し、最下層からクロボク層を確認した性格不明遺構の北端を確認することができ、平面形態が方形状を呈する落ち込みであることが判明した。

8. まとめ

今年度の調査地では、市道南側拡幅部分を平成6、7年度に調査した溝状遺構の続きや土坑などの広がりを確認した。この結果、西半である平成6、7、10年度の調査地を中心に弥生時代前期末から中期初頭にかけての土坑群と弥生時代後期前半の小規模な住居群が重なるように分布している状況が確認できた。しかし、当初の目的である田岡に関する遺構は、後世の削平によるものか溝以外には確認できていない。

(山元)



第1図 遺跡の位置（「高松南部」）



第2図 土坑群完掘状況



第3図 土坑遺物出土状況

一 角 遺 跡

1. 所在地 高松市林町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成10年4月20日～5月22日
4. 調査面積 約360㎡
5. 調査担当者 高松市教育委員会
大嶋和則
6. 調査の原因 特別養護老人ホーム増築
7. 調査結果の概要

調査地は高松平野のほぼ中央に位置する。平成5年度の特別養護老人ホーム建設時に弘福寺領讃岐国山田郡田国比定地や空港跡地遺跡に近接していることから発掘調査が行われ、弥生時代の自然河道と近世の吉国寺を検出した。今回の調査地は平成5年度の調査地の東側に隣接している。

弥生時代では、平成5年度に検出した自然河道の東岸の微高地にあたり、竪穴住居跡3棟分を検出した。うち2棟は円形で突出部を持つタイプである。竪穴住居跡からは弥生後期後半の土器に伴って石鍾も1点出土した。その他の遺構としては溝2条、柱穴多数が認められる。また、弥生時代の遺構面では地震による噴礫を検出した。礫脈は調査区の北東端で検出し、幅約40cm、検出長約90cm、噴礫の高さは約40cmの規模である。遺構との切り合い関係がないため詳細な時期の特定はできない。

古代では条里地割に伴う溝を検出したが、出土物が無く時期が決定できない。また、近世～近代においても条里地割を踏襲した溝を検出した。

8. まとめ

今回の調査で検出した弥生時代の竪穴住居跡は空港跡地遺跡の集落Aの続きと考えられる。集落域はさらに北東方向に伸びることが予想される。

また、近世の地割については絵図等と比較検討していきたい。

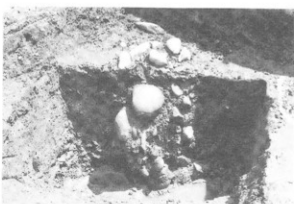
(大嶋)



第1図 遺跡の位置（「高松南部」）



第2図 SH-302完掘状況



第3図 噴礫（断面）

宗高坊城遺跡

1. 所在地 高松市林町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成10年7月3日～7日
平成10年10月14日～16日
4. 調査面積 約300㎡
5. 調査担当者 大嶋和則
6. 調査の原因 都市計画道路
福岡三谷線建設
7. 調査結果の概要

調査地は高松平野の中央で、香東川が形成する扇状地形の末端部に位置する。南東には空港跡地遺跡、北には林・坊城遺跡が隣接する。調査対象範囲は幅22m、延長1kmにもおよぶ。平成9年度に対象地の南端部分の工事立会を行ったところ、包蔵地は確認できなかったが、周辺部の状況から、対象地の南部約

200m分の現道拡幅工事に際しては工事立会を行った。また、それ以北の新規路線部分については予定地内の任意の12箇所にトレンチを設定し、試掘調査を行った。

南部の立会調査では、工事の掘削の際に地山の黄灰色シルト層上面で掘削を止め、遺構・遺物の確認を行ったが、全く検出できなかった。

新規路線の試掘では、幅1m、長さ10m程度のトレンチ調査で行った。新規路線部分の南端部分については、包蔵地は確認されなかったが、残りの範囲については遺構・遺物が多数検出された。主な遺構としては、弥生時代後期後半の自然河道、中近世の溝と柱穴があげられる。

8. まとめ

以上の結果から、調査対象地内の北約3分の2については事前の保護措置が必要と考えられる。事業者との協議の結果、平成10年度末から本調査を行うことで合意した。

遺跡内の大半を占める南北方向に流れる弥生時代後期後半の自然河道は、林・坊城遺跡の路Aにつながるものと考えられる。このため試掘調査では出土していないが、縄文時代晩期の遺物も期待される。

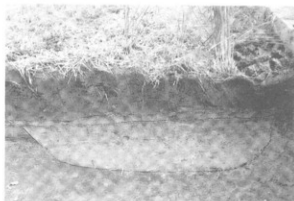
(大嶋)



第1図 遺跡の位置（「高松南部」）



第2図 トレンチ掘削状況



第3図 土坑検出状況

はやし げ しょ い せき 林 下 所 遺 跡

1. 所在地 高松市林町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成10年6月15日～7月21日
4. 調査面積 約632㎡
5. 調査担当者 小川 賢
6. 調査の原因 林下所墓地造成工事
7. 調査結果の概要

調査地は東に流れる旧河道の微高地にあたり、南接する遺跡の状況から弥生期の墓域や生活痕跡が想定され、墓地造成工事に先立ち試掘調査を実施した。その試掘調査においては、ピット、溝跡等を確認し、弥生時代前期中頃の堯等が出土したため本調査を行うことになった。調査では、現地表面より約90cm下の黄色シルト及び砂礫層の上面で遺構を確認した。調査区の北半では、希薄ではあるが灰黄色と褐灰色シルト質極細砂のピットを検出している。これらのピットからは、若干の土器片が出土しているのみで、時期の判別できるものはない。この他に調査区の北東隅で近世の土坑を5基確認している。調査区の南半では、旧河道へと延びる北東方向の溝状遺構を3つ検出している。溝は幅40～60cm、深さ20cm程で、いずれも単一の黒褐色シルトが堆積する。遺物は少量ではあるが、弥生時代前期と思われる土器片が出土している。

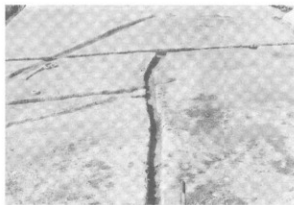
8. まとめ

調査地の中央部で弥生土器片を含んだ近世以降の攪乱が見られた等、微高地である調査地の大半で削平による破壊が考えられる。このため当初の予想に比べて確認した遺構、遺物は少ないが、調査地の南半で確認した溝跡は比較的良好に残存しており、南西部に位置する遺跡の広がりの一端を知ることとなった。

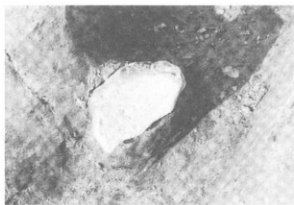
(小川)



第1図 遺跡の位置（「高松南部」）



第2図 完掘状況



第3図 弥生土器出土状況

木太中村遺跡

1. 所在地 高松市木太町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成10年6月11日～10月9日
4. 調査面積 2,700㎡
5. 調査担当者 大嶋和則 中西克也
6. 調査の原因 都市計画道路福岡三谷線建設
7. 調査結果の概要

調査地は現有道路・琴平電鉄の線路によって分断され、南から1～4工区と設定した。遺構は調査区全域に検出され、その時期は弥生時代から近世までの長期間にわたっている。その中心となるのは、中世～近世の遺構である。遺物はコンテナにして約200箱分の土器・木器が出土した。

弥生時代の遺構としては、3工区の数個の完形土器が出土した土坑と4工区の自然旧河道のみである。自然旧河道の上面及び埋土中で7世紀に比定される須恵器が出土し、最終埋没時期を示している。

中世～近世の遺構は調査区のはほぼ全域において検出された。遺構は、多数の柱穴・土坑・溝・井戸・自然旧河道である。柱穴は1工区西側・2工区中央・3工区東側・4工区全域に密集して検出され、柱材や根石が残存する柱穴も多数確認された。調査時には掘立柱建物跡としての遺構は見つけられなかったが、今後の検討により数棟の建物が判明するであろう。

土坑は円形・楕円形を呈し、「肥溜」である。

溝は条里地割に当たる位置に検出された。1工区南東隅の溝は南北方向、4工区北端の溝は東西方向である。これらの溝は幅1.7m以上測る大規模な溝である。

井戸は石組みや木枠、素掘りの3種類である。

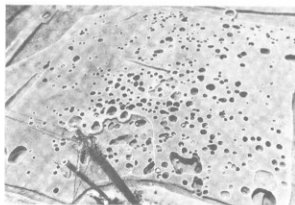
8. まとめ

今回の発掘調査では調査区全域において弥生時代後期～近世までの多数の遺構が検出された。特に、弥生時代の遺構と中世～近世の数多くの遺構を検出したことは、周辺地域の歴史を研究する上で貴重な資料を提供した。

(中西)



第1図 遺跡の位置（「高松南部」）



第2図 2工区柱穴群



第3図 1工区溝

ひら いし かみ ごう ふん 平 石 上 3 号 墳

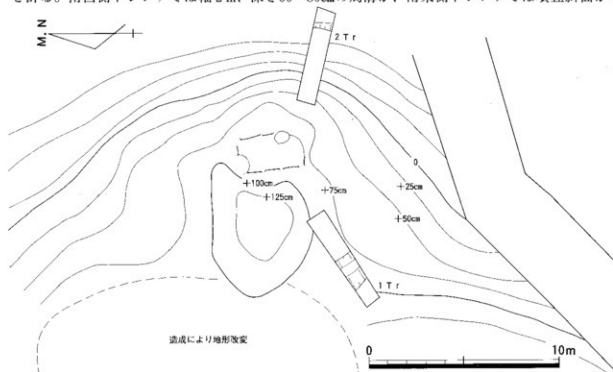
1. 所在地 高松市三谷町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成11年1月18日～21日
4. 調査面積 18.3㎡
5. 調査担当者 山本英之
6. 調査の原因 民間土地分譲
7. 調査結果の概要とまとめ

平石上3号墳は確認調査着手当初、分譲に伴う整地工事の仮置き土によって埋没していたが、仮置土と石室内に埋積していた廃棄物等を除去するとほぼ南向きに開口する横穴式石室の基底石が確認できた。石室規模は玄室長3.6m、玄室幅1.8mであった。床面は現地地表下約1m付近で、床面から2～3段の壁石が残存しているものと思われたが、業者側から墳丘範囲を事業範囲除外した上で現状保存することで同意が得られたため床面までの検出はせず、玄門から羨道にかけての部分も同様の理由により検出しなかった。

墳丘は石室の南西側および南東側に設定したトレンチにより、石室を中心とした直径13m程度の円墳と考えられ、地山削り出しにより形成されている。墳高は斜面下側の墳裾から2.2mを計る。南西側トレンチでは幅2m、深さ60～80cmの周溝が、南東側トレンチでは墳丘斜面か



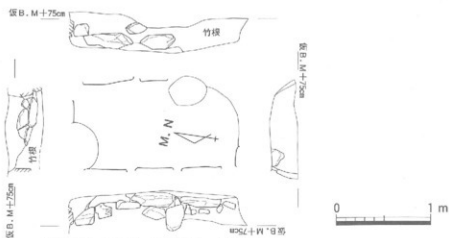
第1図 遺跡の位置（「高松南部」）



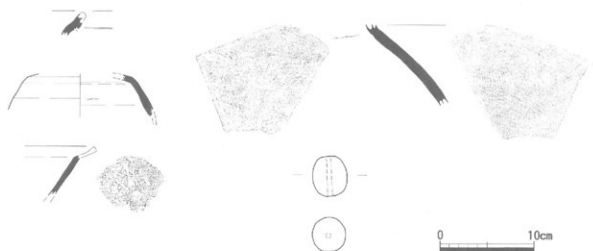
第2図 平石上3号墳地形測量図

ら平坦部に移行する高低差約25cmの段差が墳裾を限っている。

出土物としては、南西トレンチの表土層から石英製と見られる環状石錘1点、周溝埋土中から須恵器甕片数点が出土しているが、前者については表土層からの出土でもあることから後世の石製品（風鎮など）の可能性も考える必要がある。（山本）



第3図 平石上3号墳平・立面図



第4図 平石上3号墳出土遺物実測図



第5図 第1トレンチ完掘状況



第6図 横穴式石室検出状況

おくのほうせき 奥の坊遺跡

1. 所在地 高松市高松町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成10年8月5日
～平成11年3月15日
4. 調査面積 約4,900㎡
5. 調査担当者 高松市教育委員会
大嶋和則
6. 調査の原因 高松市東部運動公園建設
7. 調査結果の概要

調査地は高松市の北東、龍王山塊から派生する尾根と尾根の間のやや谷状地形を呈し、南向きの緩斜面である。

谷状地形の全体で弥生時代の竪穴住居跡、溝、土坑、柱穴等の遺構を検出した。竪穴住居跡は不明確なものまで含めると十数棟分検出した。切り合い関係から数時期におよぶものと推定されるが、概ね中期前半のものと考えられる。遺物は谷状地形の埋没土中から多数出土したほか、遺構出土のものを含め、コンテナで約200箱分が出土した。

また、古代では山田郡に一般的に見られる条里地割とは異なった方位（ $N-5^{\circ}-E$ ）の条里地割を検出した。この方位は約2km西に所在する小山・南谷遺跡で検出された条里と一致する。また、この条里地割と同一方位で掘立柱建物跡を数棟分検出した。

近世～近代では屋敷跡と鋤溝群を検出した。屋敷は付随する溝の方位から3時期の建て替えが考えられる。

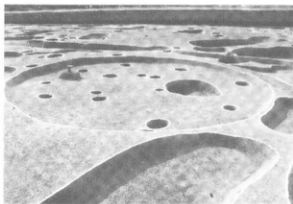
8. まとめ

遺跡全体で石器やサヌカイト剥片が多量に出土しており、未整理であるが石鏃については総数300点を超すものと思われる。その他、石鏃、磨製石斧、石錐、石庖丁、石錘、石槍状石器等多彩な石器組成である。竪穴住居の中には作業台と考えられる石が置いてあるものや、竪穴住居内に剥片を多く含む土坑が存在することから、石器製作に関わる遺跡として捉えることができる。

（大嶋）



第1図 遺跡の位置（「高松南部・志度」）



第2図 竪穴住居跡完掘状況



第3図 $N-5^{\circ}-E$ 方向の溝

しせきてんねん きねんぶつ やしま
史跡天然記念物屋島

1. 所在地 高松市屋島西町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成10年1月18日
～平成11年3月31日
4. 調査面積 188㎡
5. 調査担当者 高松市教育委員会
山元敏裕
6. 調査の原因 史跡天然記念物
屋島基礎調査
7. 調査の経緯

平成7年度から史跡天然記念物屋島に所在する文化財のうち、その性格が明らかでないものについて、文化財的価値を把握するために年間2ヶ所程度の確認調査を実施している。

平成10年度は平成8年度から調査を行っている長崎鼻古墳と北嶺山上部に所在する伝千間堂推定地において確認調査を実施した。

8. 調査の結果

第1調査地点(長崎鼻古墳)

昨年度の調査が前方部に偏ったことから、今年度は昨年度調査が行えなかった後円部3箇所、くびれ部2ヶ所の合計5ヶ所にトレンチを設定し、葺石および主体部の残存状況を確認した。確認調査の結果、後円部墳頂部に設定したトレンチでは、盗掘された竪穴式石室の断面において阿蘇熔結凝灰岩で作られた舟形石棺を確認した。石棺は一部分の確認にとどまったが、おおよその規模と特徴は判明した。竪穴式石室の規模などから全長約2.5m、幅約1m、棺蓋の高さ0.25m、棺身の高さ0.55mの規模をもつものと考えられる。石棺は扁平な蓋石の側縁部に扁平な突起を3個作りつけるもので、全体で6個の突起を持つものと想定できる。棺身の部分については蓋の合わせ部分に幅6cmの舟べり状突起帯が存在し、底は角張らず、半円に近い形状をしている。石棺の外面には鑿痕が明瞭に残るほか、棺全体に赤色顔料が塗られている。

一方、墳丘の外部施設では前方部側面で確認した3段の葺石が、くびれ部および後円部ににおいても連続していることが確認できた。各葺石の段の高さは、下段が0.9m、中段が1.5m、上段が1mである。調査前から長崎鼻古墳が丘陵にある少ない平坦面に構築されていることが判明していたが、墳丘をできるだけ高く構築した結果、各段のテラスは平坦ではなく傾斜していることが判明した。また、一部の確認にとどまったが、葺石を構築する際の作業範囲の基準となる葺石列を確認することができた。葺石列は下段の葺石に認められ、葺石列に使用されている安山岩は、他の葺石よりもやや大きめのものを利用し、1mの間隔をおいて確認した。この葺石列は傾斜部だけではなく、一部テラス面まで上がっている状況が認められた。この他、葺石が聳かかっている傾斜部分以外では、テラス面の他ほとんどの箇所でも小礫を敷き詰めている状況も確認できた。

第2調査地点(伝千間堂跡)

屋島北嶺山上部平坦地の中央部に所在する湿地の西側において遺構の確認調査を行った。この湿地の中に昭和55年度にトレンチ調査を行っているが、調査の結果、明確な遺構は確認して



第1図 遺跡の位置(「高松北部」)

いない。調査前の状況から、湿地の外側に土手状の高まりが観察できたことから、土手状の高まりに直交する東西方向にトレンチを設定した。調査の結果、土手状高まりの下部から幅2m程度の石列を確認したことから、石列が確認された範囲を中心に北側にトレンチを拡張した。拡張した範囲は石列が続いていることが認められ、特に西側の石列は長さ4m程直線に並び、多いところでは3段積んでいることが確認できた。周辺からは、12世紀末から13世紀にかけてのものと考えられる黒色土器、瓦器、土師器の碗などの破片が出土している。

9. まとめ

調査の結果、第1調査地点である長崎鼻古墳では、3段の葺石を確認したほか、在地の古墳の特徴である前方部に比べ後部部がずり落ちる構築方法とは違い、前方部から後部部にかけて水平に作られている畿内的な古墳の特徴を持っている。トレンチによる一部分の調査であるが、4世紀末から5世紀初頭と考えられる阿蘇塔結凝灰岩で作られた石棺を確認したことがあげられる。これまで九州産の石棺は、5世紀中葉に香川県西部の丸山古墳、青塚古墳の例が認められていたが、これを数十年遡り九州で舟形石棺が作られ始めた頃の搬出例として注目できる。

当古墳の立地が屋島の先端に位置することから、以前から海に関係する者の古墳であると考えられてきたが、この想定を実証し、当地域の4世紀末から5世紀初頭の古墳社会を考える上で重要な手がかりを提供したものと考えられる。

第2調査地点で確認した石列は検出状況から湿地にともなうものと考えられ、周辺から出土した遺物から12世紀末から13世紀にかけてのものと考えられる。この時期に湿地を含めた調査地周辺が何らかの目的で利用されていたことは確かである。(山元)



第2図 くびれ部葺石検出状況



第3図 主体部舟形石棺出土状況



第4図 第2調査地点完掘状況



第5図 石列検出状況

お ば な い せ き 尾 端 遺 跡

1. 所在地 木田郡三木町田中尾端
2. 調査主体 香川県教育委員会
3. 調査期間 平成10年9月4日
4. 調査面積 33㎡
5. 調査担当者 文化行政課 西村尋文
6. 調査の原因 県道高松長尾大内線
道路改良工事
7. 調査結果の概要

尾端遺跡は、高松市と三木町の境界より東へ延長300m、町道田中水上線に隣接した木田郡三木町田中に所在する。地形的には蓮池の西岸を形成する低丘陵の延長部分に位置し、その丘陵の西斜面に遺跡は展開している。調査は平成8～9年度の2ヶ年にわたり県道工事に伴う調査を、勸香川県埋蔵文化財調査センター（以下センターと略称）により実施している。本年度の調査は県道と宅地の取付き部分の工事に伴う調査で、遺跡西端部の丘陵裾部にあたる。また、今年度の調査区をセンターの調査区と照合すれば、センター調査区のⅡd区の北辺にあたる。

平成8～9年度の調査成果によれば、県道本線部分の調査では、対象地周辺に展開する条里型地割に合致する小溝群及びその溝に隣接して展開している掘立柱建物群等を検出している。なお、これらの遺構群の中には7世紀中葉に属する遺構がみられ、県下の条里地割の資料中でも最古の部類に位置される点より、大変貴重な調査成果になっている。

本年度の調査では、センター調査区のⅡd区から続く南北溝2条、東西溝1条、柱穴5基を検出した。検出した溝は、幅約0.4m、深さ約0.3mを測る小規模な溝で、いずれの溝も条里地割の方向に合致している。また、溝中からは7世紀前半の須恵器が出土し、時期的な点でも既存の調査成果と符合し、先の調査成果を補強する結果となった。

(西村)



第1図 遺跡の位置（「高松南部」）



第2図 遺構検出状況



第3図 溝状遺構土層断面

弁 天 島 古 墳 群

1. 所在地 小豆郡内海町苗羽
2. 調査主体 徳島文理大学文学部
文化財学科
3. 調査期間 1998年8月18日～9月10日
1999年2月25日～3月11日
4. 調査面積 約50㎡
5. 調査担当者 文学部講師 大久保徹也
6. 調査理由 学術調査
7. 調査成果の概要

小豆島東部の内海湾内に浮かぶ弁天島に、積石塚様の墳墓および箱式石棺墓群が存在することは森井正氏によって早くから確認され、内海町立小豆島民俗資料館に出土資料の一部が保管されていたが、詳細な調査の機会がなかったためその実体は不詳であった。1996年に徳島文理大学の小豆島総合調査の折に、急速な浸食によって破壊が進行している同古墳群の現況を簡単に報じた。その後 将来的な保存に向け基礎資料の充実を望む内海町教育委員会の支援を受け、瀬戸内海域総合調査の一環として98年に徳島文理大学文化財学科が確認調査を実施した。

古墳群は内海湾内北東部に位置する長200m弱の弁天島北西端に位置する。小豆島最大規模の安田川流域平地に相対し、扁平鈕銅鐙と平形銅劍出土で著名な粟地遺跡群の正面に位置する。

今回の調査では積石墳1基 箱式石棺墓5基を確認した。積石墳は浸食により既に墳丘北半部を失うと共に中世前半に遡る擾乱によって損傷が著しいものの、墳丘基底部と埋葬主体部を確認できた。墳丘は径6m内外の円形を呈し積石墳墓としては最小クラスに属する。弁天島の基盤をなす凝灰岩の拳大～人頭大塊石で築く。高さは不明。墳丘中央部に穿った墓壇にはほぼ東西に主軸を向けた箱式石棺を納める。長さ1.75m以上幅0.4mを測り、主に島外産の安山岩板石で構築する。床には凝灰岩板石を敷く。更に墳丘材と同質の凝灰岩礫を積み上げた粗雑な竪穴石椁で石棺を覆う。椁上部は既に失われているが部分的に6段60cm強の壁体を観察できる。副葬品類および赤色顔料の使用は確認できない。なお全般的な構築状況から棺設置・遗体安置・棺被覆(=石椁構築)完了後に墳丘を構築したことが復元できる。また墳丘外表で図示した広口壺片・小形鉢片を検出した。これらから築造時期を古墳時代前期前半・集成編年2期もしくはこれを若干遡る時期と推定している。

箱式石棺墓は5基を確認した。盗掘と浸食で完存するものはない。いずれも島外産花崗岩塊石に若干の凝灰岩礫を交え構築する。これらは用材・形態が概ね類似し、また主軸方位も相似する点から同一時期の所産と考える。従来の採集資料を含め、石棺群から出土した須臾器類より7世紀初、TK209式並行型式を前後する時期の築造と推定している。したがって位置的には重複するものの積石墳とは直接関連するものではない。なお今次調査では他に鉄刀子片・練り玉が出土している。

(大久保)

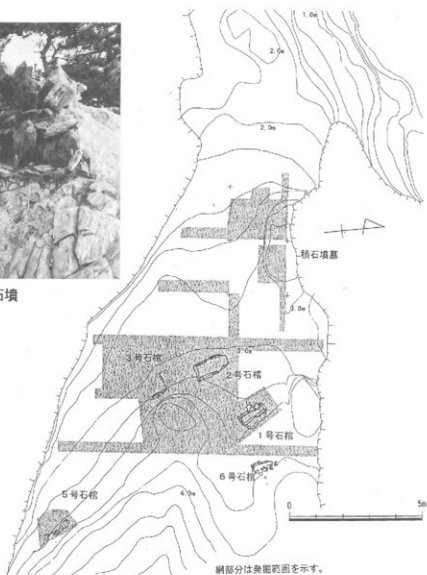
参考文献：大久保徹也編「徳島文理大学文学部文化財学科共同研究 弁天島古墳群調査概要報告」徳島文理大学文学部文化財学科1999年3月



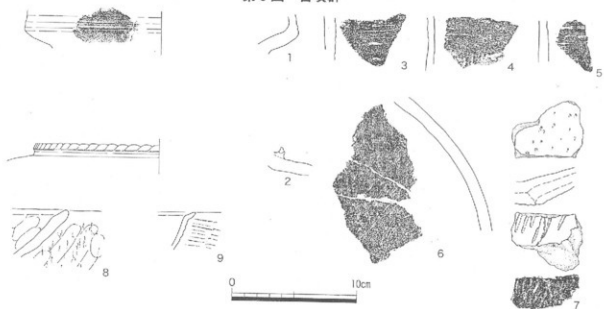
第1図 遺跡の位置(「草壁」)



第2図 積石墳



第3図 古墳群



第4図 積石墳出土土器

いしだ こうこうこうていないいせき
石田高校校庭内遺跡

1. 所在地 大川郡寒川町石田字東原甲
2. 調査主体 香川県教育委員会
3. 調査期間 平成10年8月21日～8月27日
4. 調査面積 約90㎡
5. 調査担当者 文化行政課 塩崎誠司
6. 調査の原因 石田高校校庭増築事業
7. 調査結果の概要

調査地は、弥生時代後期の大规模な集落跡が広がることで知られる同遺跡内の運動場北西端部に位置する。当初、運動場が所在する範囲については、これまでの調査成果から、低地帯が広がる可能性が高く、当該期の集落跡についても、低地帯の縁辺部で遺構密度は比較的低いとの想定がなされていた。

調査の結果、古墳時代初頭と推定される竪穴住居1棟及び柱穴跡、土坑等を検出している。

竪穴住居については、検出範囲が全体の約半分程度で、残りは調査区外へ伸びると想定されるが、平面形は円形に近い多角形で直径は約6.5m、残存深は約35cmである。平面形については、全体を検出していないので断定はできないが、当該期の多角形住居は比較的大型のものが多く、出土遺物からもその特殊性が指摘される場合もあり、さらに検討を深める必要がある。竪跡は住居跡のほぼ中央で検出しており、深さは床面から約25cmである。埋土上層では、石包丁、石鏃をはじめ弥生時代中～後期全般の遺物が出土するもの、最終面である床面直上から出土した遺物は、いわゆる布留式のものが大半である。その他竪穴住居以外の遺構についても、概ね弥生時代終末～古墳時代初頭のなかで捉えられるものである。

8. まとめ

当遺跡については、これまで小規模な調査が多く、今回の調査も面積は僅かでこれまでの部分的な調査の域をでるものではない。ただし、これまでの調査を通して遺跡全体の中での集落立地及びその変遷について新たな知見も得られている。今後、大規模な調査の進む南側の森広遺跡の成果もあわせて遺跡全体としての評価・検討が必要であろう。(塩崎)



第1図 遺跡の位置（「志度」）



第2図 調査地全景（遺構検出状況）



第3図 竪穴住居完掘状況

もり ひろ い せき 森 広 遺 跡

1. 所在地 大川郡寒川町石田東字東原
2. 調査主体 寒川町教育委員会
3. 調査期間 平成11年1月18日～1月31日
4. 調査面積 138㎡
5. 調査担当者 寒川町教育委員会
山本一伸

6. 調査の原因 集会場建設
7. 調査結果の概要

本遺跡は平成7年度に調査した森広遺跡の東部に位置する。調査区内に2区の調査区を設定して調査を行った。検出した遺構は(1)弥生時代後期～古墳時代初頭にかけてのもの(2)古墳時代後期(3)古代の時期に大別できる。(1)は竪穴住居跡、土器棺、柱穴等を検出した。竪穴住居は2区北半部で3棟切り合っている

ことが確認できた。土器棺については両調査区の南半部で併せて4基検出した。1区で検出したものは中近世の耕作により上半部が削られていた。(2)は拳大の石を床及び壁面に張りめぐらす構造の石室を2基及び、土坑を検出した。石室は1区南部で検出し、土器棺同様上半部が削られていた。規模は1.6m×0.8m・深さ約0.3mのもの、1.6m×0.6m・深さ約0.1mのものが直交するかたちで検出した。遺物は墓塚から須恵器片が出土している。(3)は径約70cmを測る柱穴を検出した。調査区隔部であったため規模等は不明である。

8. まとめ

今回の調査で検出した遺構は、過去の調査で確認された範囲がさらに南東にも広がっていることが確認された。同時に墓域の範囲もさらに広がる事が確認できた。

古墳時代後期と考えている古墳については、墳丘が中近世の耕作によって削られている為、明確に検出できなかった。本遺跡周辺で確認されている当該期墓制を詳細に調査し、検出した遺構について十分検討したい。
(山本)



第1図 遺跡の位置(「志度」)



第2図 土器棺出土状況



第3図 石室出土状況

高松 廃寺 跡

1. 所在地 大川郡白鳥町白鳥字北池
2. 調査主体 白鳥町教育委員会
3. 調査期間 平成11年1月4日～1月11日
4. 調査面積 約150m²
5. 調査担当者 大川地区広域行政振興整備事務組合
萬木一郎・阿河鋭二
6. 調査の原因 民間土地造成
7. 調査結果の概要

調査地は白鳥平野の西部で、大内町との境をなす山塊の南麓にあたる。周囲には西側尾根に大日山古墳が、山塊北東側には白鳥廃寺が所在する。現在の高松廃寺は果樹園となっており今回、南側の畑地において土採取による掘削がおこなわれるため、確認調査を実施した。

調査は果樹園より2段下った、比高差約8mの畑地に南北トレンチを2ヶ所設定した。この結果、東トレンチの南端において地表面から約1mの深さで、壁面に溝状の土層が検出された。さらに、延伸部分を確認するため東西に試掘幅を拡張したところ、溝ではなく長楕円形の土坑(SX-01)であることが判明した。土坑は東西に長軸をとり長さ約7.1m、幅約2.0m、深さ15～20cm、東西両端にはピットが掘りこまれている。また、底面は部分的に赤橙色に変色しており、被熱したものとおもわれる。また、ピット内には炭が堆積していた。遺物には第3図のような須恵器や瓦などが少量出土している。

8. まとめ

高松廃寺についてはこれまで1基だけ残る礎石、表採された瓦や立地条件などから、平安時代後期頃の小規模な寺院と考えられている。今回の調査で検出されたSX-01は、状況などからして何らかの焼成遺構と考えられる。なお、北東へ約15mほど離れた山麓斜面に窯跡を確認することができ、関連性が窺われる。

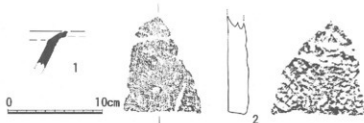
(阿河)



第1図 遺跡の位置(「三本松」)



第2図 SX-01検出状況



第3図 SX01出土遺物

なり しげ い せき 成 重 遺 跡

1. 所在地 大川郡白鳥町白鳥
2. 調査主体 白鳥町教育委員会
3. 調査期間 平成11年1月21日
～平成11年4月14日
4. 調査面積 400㎡
5. 調査担当 大川地区広域行政振興整備事
務組合 萬木一郎
6. 調査の原因 横断道関連事業の圃場整備
事業配水管埋設工事
7. 調査結果の概要

成重遺跡は、大川郡白鳥町白鳥、湊川によって形成された標高13m前後の矮小な沖積平野上に立地する。

調査区は、横断道関連事業の圃場整備事業配水管埋設工事に伴う埋蔵文化財調査として、国道318号線から西側、四国横断自動車道建設に伴う調査区の南側に沿って幅約4m、長さ約150mの区間の調査を行った。

遺構面は、2面あり上層は古墳時代から近世にかけての土坑・ピット、下層からは、弥生時代中期後半から後期までの土器を含む集石状遺構を4基検出した。

集石遺構は、いずれも拳大から人頭大のレキおよび弥生時代中期後半から後期の土器を含んでいるが、レキおよび土器の密度については、塚状に盛られた頂部分にわずかにレキおよび土器が見られるものが1基、全面に拳大のレキおよび土器を含むものが3基検出され、出土状況については、破片がレキの混じって出土し、密度の差はあるが完形のものは出土していない。各集石部分の範囲は定まっておらず、今回は調査の範囲が限られていたので完全には検出されていないが、ほとんどが不定形帯状をしており埋葬施設は検出されていない。

このような状況からレキと土器を含んだ集石状遺構は、盛土状の人為的にレキや土器が充填された形跡が土層に見られるが、遺構の性格は不明である。

8. まとめ

今回の調査は、四国横断自動車道建設に伴う県の埋蔵文化財調査区に沿ったかなり狭い幅4m程の調査であったが集石状遺構を4基検出することができた。ただ、この遺構についての性格や内容については周辺で行われている調査の結果も含めて、国道318号線から西側の湊川に至る地形との関係について報告書で検討していきたい。(萬木)



第1図 遺跡の位置（「三本松」）



第2図 土坑ピット検出状況



第3図 集石状遺構検出状況

3. 平成10年度財団法人香川県埋蔵文化財調査センター発掘調査概況

(1) 県事業に伴う調査状況

1. 調査の概要

平成10年度の県道関係を除く県事業は、公安委員会警察本部の高松北署建設に伴う高松城跡、住宅課の普通寺住宅団地建設に伴う山南遺跡、土木部都市計画課の錦町国分寺綾南線改良に伴う松並・中所遺跡の3遺跡の発掘調査である。

高松北署建設に伴う高松城跡の発掘調査は、昨年度3月からの継続調査であり、高松市西内町で実施した。元々四国旅客鉄道病院の跡地に位置し、一部はすでに地下室等で消失していたが、江戸時代初期の面が残存し、溝・井戸等を検出した。調査区の中央に南北に道路の側溝の痕跡と考えられる溝を検出した。当時の城内の地割り等を明らかにする上で重要な知見を得た。

普通寺住宅団地建設に伴う山南遺跡の発掘調査は、当初2,000㎡を予定していたが、施設計画の確定に伴い2,780㎡の発掘調査を実施した。調査では室町時代～江戸時代にかけたの集落跡を検出した。

都市計画道については、高松市松並町で錦町国分寺綾南線の松並・中所遺跡の発掘調査を昨年度に引き続き実施した。現道の拡幅工事であり、用地買収の問題や隣接地への進入路確保のための調査効率の関係で、6ヶ月間で1,750㎡を対象として発掘調査を行った。昨年度と合計すると4,050㎡の調査となる。調査対象地は昨年度調査区の北側で、昨年度引き続き、旧香川郡桑里の坪界線に接した鎌倉時代の集落跡を検出するとともに弥生時代の集落跡を検出した。

2. 遺跡別発掘調査の概要（県事業）

遺跡名	所在地	調査面積	調査期間	遺構	遺物
松並・中所	高松市松並町	1,750㎡	平成10年8月～11年1月	竪穴住居 掘立柱建物 土坑 溝	弥生土器 土師器 須恵器
山南	普通寺市生野町	2,780㎡	平成10年6月～10年12月	掘立柱建物 土坑 溝	土師器 須恵器
高松城跡	高松市西内町	900㎡	平成10年4月～10年6月	掘立柱建物 井戸 土坑 溝	瓦 磁器 木製人形

(2) 県道関係に伴う調査状況

1. 調査の概要

平成10年度の県土木部道路建設課が原因となる県道等の発掘調査は、東から大内白鳥インター線の引田町川北遺跡・大内町住屋遺跡、太田上町志度線の高松市多肥宮尻遺跡と県管理の国道438号の川津六反地遺跡である。川北遺跡の県道部は、四国横断自動車道の引田インターチェンジ建設に伴って調査を実施した川北遺跡の南側に隣接する箇所である。10年6月に実施した予備調査で確認し、その後県道部と確認し発掘調査を実施した。イン

ターチェンジ部が奈良時代を中心とする時期であったのに対して県道部は鎌倉時代の集落跡である。大内町住居遺跡の調査箇所は、平成9年度の上半期に実施した個所の北側に隣接する。いずれも現道の拡幅工事予定地である。昨年度の調査内容と同じく、古墳時代後期のカマド付きの竪穴住居を密集する状況で検出した。限定された空間に繰り返し立て替えられ、集落として継続した遺跡であり、場所に対する居住集団のこだわりが強く、その性格が目される。

県道太田上町志度線に伴う高松市多肥宮尻遺跡も昨年度に引き続き調査であり、西側の多肥松林遺跡部も含んで調査を実施した。当初計画を変更して年度後半に、4,000㎡を対象として調査を実施した。この調査では昨年度に引き続き埋没河川を検出し、弥生時代中期の木製品を多く検出した。

国道438号は県管理国道で、県が原因者となることからここで取り扱うこととする。坂出市川津町に所在する川津六反地遺跡を調査した。調査対象地は、昨年度発掘調査を実施した県道富熊宇多津線に伴って実施した川津六反地遺跡の北側に位置し、現国道の拡幅に伴う調査である。弥生時代末の溝内から良好な一括土器が出土した他、中世の条里地割の坪界溝等を検出した。

2. 遺跡別発掘調査結果の概要（県道）

遺跡名	所在地	調査面積	調査期間	遺構	遺物
住居	大川郡大内町川東	1,200㎡	平成10年4月～10年8月	竪穴住居 土坑 溝	弥生土器 土師器 須恵器
川北	大川郡引田町小海	1,294㎡	平成10年9月～10年11月	掘立柱建物 土坑 溝	土師器 須恵器 鉄器
多肥宮尻	高松市多肥上町	4,000㎡	平成10年10月～11年3月	掘立柱建物 溝 埋没河川	弥生土器 土師器 須恵器 木器
川津六反地	坂出市川津町	1,034㎡	平成11年2月～11年3月	溝	弥生土器 石器 土師器

(3) 横断道事業に伴う調査状況

1. 調査の概要

四国横断自動車道のうち高松市内区間及び津田引田間建設に伴う埋蔵文化財調査は平成8年度から開始され、本年度で3年目となった。本年度の当初計画では高松市内区間が約27,000㎡、津田～引田間が約84,000㎡を調査する予定であったが、用地買収・家屋撤去の遅れ、工事工程との調整、また予備調査の後に本調査に至らなかった遺跡などがあり、当初計画とは異なる進行となった。

高松市内区間の本年度の調査面積は154,969㎡で、昨年度までの実績と合わせると全体（約37,000㎡）の65%が終了したことになる。一方津田～引田間については、本年度の調査面積は71,399㎡で、昨年度までの実績と合わせると全体（約150,000㎡）の83%が終了

したことになる。

高松市内の横断道間係埋蔵文化財発掘調査対象地は、高松・善通寺間と高松市内区間の2.Ⅰ区に分かれる。西部の高松・善通寺間に該当する遺跡としては正箱遺跡・香川郡条里B地区、東部の高松市内区間では香川郡条里C地区西部、香川郡条里D地区、林・坊城遺跡、東山崎・水田遺跡、前田東・中村遺跡がそれぞれ年度当初の調査対象地で、合計26,691㎡を調査する計画であった。このうち香川郡条里B地区は、東側の国道11号に面したインターチェンジの建設省施工箇所とその西の公団施工のR区間に分かれる。年度当初に実施した建設省施工の香川郡条里B地区では予備調査の結果、中世の集落域が判明し、中森遺跡として引き続き発掘調査を実施した。香川郡条里D地区は、用地買収の目処が立たず、平成11年度調査対応予定であった香川郡条里C地区の東部に調査工程を変更対応することとなった。平成10年度、最終的には、高松・善通寺間で正箱遺跡が800㎡、香川郡条里B地区の公団施工区間が200㎡、中森遺跡で3,015㎡の発掘調査を実施し、高松市内区間では香川条里C地区で770㎡、林・坊城遺跡で2,000㎡、東山崎・水田遺跡で1,978㎡、前田東・中村遺跡で7,206㎡の発掘調査を実施した。

平成10年度の調査で工事計画が確定している調査については、正箱遺跡、林・坊城遺跡、東山崎・水田遺跡の発掘が終了し、他の遺跡については、家屋撤去予定部等を中心として次年度以降の対応となった。

津田引田間調査の対象地は19遺跡で、今年度がこの区間の調査としては最大規模になった。

中山地区はA～Dの4地区に分かれ、6月に予備調査を実施した。A～C地区は丘陵部で、寺院跡や山城跡の存在が予想されたが、尾根上のトレンチからは遺構・遺物は検出されなかった。D地区は平地部で丘陵寄りから古代の遺構・遺物が検出され、9月から本調査を実施した。本調査の結果、奈良時代の掘立柱建物跡、溝跡、井戸跡等が検出された。遺跡名は中山という地名が広範囲を指すことから、字名をとり「坪井遺跡」となった。

三殿地区は7月に予備調査を実施した。A地区は番屋川を挟んだ平地部で、川北部では遺構・遺物は検出されなかったが、川南部では山寄りの箇所から弥生時代の包含層を検出した。南部については3月に追加の予備調査を実施し、本調査は次年度の予定である。丘陵のB地区は予備調査で終了した。

町田地区は墳墓の存在が予想されていたが、9月に予備調査を実施したが遺構・遺物は検出されなかった。楠谷A地区についても墳墓の存在が予想されていたが、3月に予備調査を実施したが遺構・遺物は検出されなかった。

下屋敷地区は4～8月に本調査を実施し、縄文時代から中世までの遺構・遺物を調査した。本遺跡は本年度で調査完了予定であったが、金毘羅山斜面の切り土が頂上まで及ぶことが明らかとなったので、次年度以降に山頂付近の調査が残ることになった。なお、遺跡名は下屋敷が広範囲を指すことから、「金毘羅山遺跡」となった。

別所A地区は昨年度予備調査を実施して墳墓を確認していたもので、本調査を実施した。調査の結果、石蓋土坑1基、箱式石棺1基、土壙墓4基を検出した。なお遺跡名については、遺跡北部の丘陵名を採用して「塔の山南遺跡」となった。

原間遺跡は昨年度からの継続調査で、本年度は東西の丘陵上の古墳の調査を中心に実施した。西側の丘陵では粘土椀を埋葬主体とする古墳等、東側の丘陵では横穴式石室墳等を

調査した。

樋端地区はA～E地区に分けられているが、原間遺跡と併行して予備調査を実施した後、A・C・D地区について本調査を実施した。A地区では土壌墓から鉄刀が出土した。C地区では壺棺墓12基等を検出した。D地区では横穴式石室1基、壺棺墓8基等を検出した。

成重遺跡は、昨年度調査で検出された集石墓の取扱いが今年度の大きな課題であった。集石墓については四国北東部の地域色を示す弥生時代中・後期の墳墓で、積石塚や前方後円墳の成立を考える上で貴重なものであるとの考古学的評価をもとに、現状保存について関係機関が協議を重ねた結果、国道西側の集石墓集中箇所（約7,000㎡）については盛土構造を橋梁構造に変更することが本年度初めに決まり、橋脚位置以外の集石墓は現状保存されることになった。これを受けて本年度調査は橋梁の脚部分の調査や東西両端の調査を行った。

谷地区は7月に予備調査を実施し、位置不詳であった近世窯跡の位置を確認した。本調査は次年度以降の予定である。

池の奥遺跡は4月から本調査を実施し、弥生時代中・後期の集落跡を調査した。池の奥地区の善門池西遺跡は12月から昨年度調査区の南側を本調査し、古墳時代の竪穴住居跡等を発掘した。

塩屋地区はA・B2地区に分かれるが、4月に予備調査を実施した結果、A地区において遺構が確認されたため8月より本調査を実施した。調査の結果奈良時代を中心とする時期の掘立柱建物跡が12棟発掘された。

辻田地区は本年度4・5月に予備調査を実施した後、B地区の本調査を実施した。本調査の結果、弥生時代の竪穴住居跡が検出された。A地区の本調査は次年度の予定である。なお遺跡名については、調査地点の通称からA地区は「辻田石垣遺跡」、B地区は「辻田谷川下池遺跡」となった。

鹿鹿遺跡は4～8月に本調査を実施した。弥生時代ではサヌカイトの集積土坑が検出され、中世では掘立柱建物跡を13棟検出した。本遺跡の調査は本年度で完了した。

以上の津田引間調査の大半は日本道路公団四国支社の委託を受けて実施したものであるが、別所地区300㎡、原間遺跡530㎡、樋端地区446㎡、成重遺跡179㎡については香川県土木部の委託を受けて実施したものである。

2. 遺跡別発掘調査結果の概要（横断面）

遺跡・地区名	所在地	調査面積	調査期間	遺構	遺物
正箱	高松市権紙町	800㎡	平成 11年1月 ～ 11年2月	掘立柱建物跡 溝跡 土器溜まり	須恵器・土師器 弥生土器・旧石器
八幡	高松市権紙町	200㎡	平成 11年2月 ～ 11年3月	溝跡 柱穴	土師器・須恵器
中森	高松市権紙町	3,015㎡	平成 10年4月 ～ 10年8月	掘立柱建物跡 溝跡・井戸跡	中世陶磁器 鍔型・鉄洋 旧石器

遺跡・地区名	所在地	調査面積	調査期間	遺構	遺物
香川郡桑里C	高松市勅使町	770㎡	平成 10年4・5月 11年3月	溝跡	弥生土器 黒色土器
林・坊城	高松市林町	2,000㎡	平成 10年9月 ～ 10年12月	円形周溝墓 溝跡	縄文土器 弥生土器
東山崎・水田	高松市東山崎町	1,978㎡	平成 10年7月 ～ 10年9月 11年2月	溝跡 柱穴 土坑	須恵器・土師器 陶磁器・瓦
前田東・中村	高松市前田東町	7,206㎡	平成 10年4月 ～ 11年3月	独立柱建物跡 溝跡、井戸跡 柱穴、土坑 土器焼成窯	弥生土器 須恵器・土師器 黒色土器・陶磁器
坪井	大川郡大内町 中山	6,566㎡	平成 10年6・9月 ～ 11年3月	独立柱建物跡 溝跡、井戸跡 土坑、	須恵器・土師器
三殿	大川郡大内町 三殿	135㎡	平成 10年7月	ピット、包含層	弥生土器
谷	大川郡白鳥町 白鳥谷	111㎡		近世陶器窯跡	陶器
町田	大川郡大内町 町田	69㎡	平成 10年9月	なし	なし
橋谷A	大川郡大内町 水主	1,000㎡	平成 11年3月	なし	なし
金毘羅山	大川郡大内町 水主	3,600㎡	平成 10年4月 ～ 10年8月	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 溝跡、土坑	弥生土器、須恵器、 土師器、つつ状耳飾
塔の山南	大川郡大内町 水主	1,300㎡	平成 11年1月 ～ 11年3月	箱式石棺 石蓋土壇 土壇墓	土器
原間	大川郡大内町 川東	24,243㎡	平成 10年4月 ～ 11年3月	竪穴住居跡 古墳(粘土槨 ・横穴式石室等)	須恵器・土師器 鉄製品・石製品
橋端	大川郡白鳥町	8,608㎡		土器棺墓、古墳 (土壇・横穴式石室)	須恵器・土師器 鉄製品・人骨・ 耳環
成重	大川郡白鳥町 白鳥	6,543㎡	平成 10年4月 ～ 11年3月	竪穴住居跡 周溝墓 集石墓 掘立柱建物跡	弥生土器・土師 器・石器・鉄器 ・銅銭
池の美	大川郡白鳥町 谷	8,700㎡	平成 10年4月 ～ 11年3月	竪穴住居跡 土坑 自然河川跡	弥生土器・石斧 ・石鏃・石包丁 ・石錐・石剣
善門池西	大川郡白鳥町 谷	2,500㎡	平成 10年12月 ～ 11年3月	竪穴住居跡 溝跡 配石遺構	弥生土器 土師器・須恵器
川北	大川郡引田町 引田	6,308㎡	平成 10年8月 ～ 11年3月	掘立柱建物跡 溝跡 自然河川跡	須恵器・土師器 緑釉陶器・円面 硯

遺跡・地区名	所在地	調査面積	調査期間	遺構	遺物
天王谷	大川郡引田町 塩屋	1,200㎡	平成 11年2月 ～ 11年3月	柱穴 溝跡	須恵器・土師器 瓦
畷田 谷川下池	大川郡引田町 引田	1,450㎡	平成 10年12月 11年1月	柱穴・土坑	弥生土器 石鏃
鹿庭	大川郡引田町 吉田	3,800㎡	平成 10年4月 ～ 10年8月	掘立柱建物跡 土坑	石鏃・土師器
畷田石垣	大川郡引田町 引田	554㎡	平成 10年4月 ～ 10年5月	柱穴	土器

(4) 国事業に伴う調査状況

1. 調査の概況

ここでの国事業とは四国横断自動車道を除く国が原因となる開発事業とし、四国横断自動車道の高松市内区間で建設省が事業主体となった発掘調査があるが、横断道関係として一括し別途報告する。

平成10年度の国事業は、建設省四国地方建設局が事業主体の国道関係の発掘調査と中国地方建設局が事業主体の機動隊舎の建設に伴う発掘調査を実施した。

この内、国道はいずれも国道32号バイパス関係で、綾歌郡綾歌町栗熊西所在の佐古川・窪田遺跡と同町栗熊東所在の北内遺跡の発掘調査および綾歌町栗熊東と綾南町小野で予備調査を実施した。当初計画を作成した平成9年11月時点では、佐古川・窪田遺跡の発掘調査対象地が確定していなかったこともあり、当初6,300㎡を対象としたが7,381㎡に変更対応した。佐古川・窪田遺跡は、昨年度からの継続事業で、昨年度調査箇所の隣接地の調査である。今年度1,164㎡を調査し、昨年度と合わせて8,008㎡を調査したこととなる。遺跡内容としては弥生時代前期から中期初頭にかけての周溝墓群と古墳時代後期のカマド付き竪穴住居を検出したが、3群に分かれ、単葬の周溝墓以外の墓種が含まれず、形状が円形と方形のもので構成される周溝墓群は注目されるものである。

また北内遺跡では、佐古川・窪田遺跡よりはやや後出する時期の土坑墓と条里地割に規制された古代末から中世にかけての建物群を検出した。この内、弥生時代前期から中期にかけての墓制が注目される。やや先行すると考えられる佐古川・窪田では大きく3群に分けられる周溝墓を集中して検出した。最も立地条件に恵まれた箇所から周辺へと墓域が拡大し、しかも円形と方形の周溝墓の数量に大幅な差異がないことなどから各群は同一の単位集団の墓域として連続して形成されたものである可能性が高いと考えられる。一方、北内遺跡では成人墓と考えられる2基の土坑墓を検出しただけである。基本的には同一水系に属する両遺跡での墓制の様相の差異が意味するものは注目される。

また、機動隊舎建設に伴う汲仏遺跡の調査は当初1,200㎡を見込んで発掘調査を着手したが、工事内容の確定に伴い対象面積が2,470㎡に増加したため、工程を変更して対応した。弥生時代・平安時代の集落跡を検出した。弥生時代前期の環濠と考えられる2重の溝

や9世紀代の庇を持つ大型掘立柱建物が出土した。

2. 遺跡別発掘調査結果の概要（国事業）

遺跡・地区名	所在地	調査面積	調査期間	遺構	遺物
佐古川・窪田	綾歌郡綾歌町栗熊西	1,164㎡	平成10年4月～10年6月	方形圓溝墓 円形圓溝墓 竪穴住居 土坑、溝	弥生土器 土師器 須恵器
北内	綾歌郡綾歌町栗熊東	5,608㎡	平成10年8月～11年1月	土坑墓 溝 掘立柱建物	弥生土器 土師器 須恵器
国道32号予備調査	綾歌郡綾南町小野	609㎡	平成10年7月～10年7月		縄文土器 弥生土器 須恵器
汲仏	高松市多肥下町	2,470㎡	平成10年10月～11年1月	竪穴住居 掘立柱建物 溝	弥生土器 土師器 須恵器

香川県埋蔵文化財調査年報

平成10年度

平成12年3月31日 発行

編集 香川県教育委員会事務局文化行政課

高松市番町2丁目1番1号 NTT番町ビル

電話 (087) 831-1111

発行 香川県埋蔵文化財研究会

印刷 株式会社

本書は、版權者の丁承を得て埋蔵文化財研究会で発行したものである。